

Spiritualism News Letter

1999
第5号
4月1日発行

スピリチュアリズム・ニューズレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場 発行人/小池里予 〒441-3141愛知県豊橋市大岩町字北山468-1 TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257

退行催眠と前世療法の問題点—1

ニューエイジや新新宗教における前世探しブーム

ニューエイジや新新宗教では、前世探しが盛んに行われています。そして欧米では、宗教レベルを超えて、科学者が前世研究に乗り出しています。米国における前世への関心は、エドガー・ケイシーのリーディングや、1956年のバーンスタインによるブライディー・マーフィー事件（退行催眠による輪廻転生の真偽論争）によって先鞭がつけられました。また英国人研究者アレキサンダー・キャンノンによる退行催眠は、「過去世療法」として人々に知られるようになっていきました。（1970～1980年）

そうした土台の上に、ニューエイジ運動が到来し、女優シャーリー・マクレーンの『アウト・オン・ア・リム』『ダンシング・イン・ザ・ライト』が出版され、世界的大ヒットを飛ばすことになったのです。（このシャーリー・マクレーンの前世譚は、後にチャネラーの創作であったことが暴露され、彼女自身もそれを認め謝罪することになりました。）そして1980年代後半から、ブライアン・ワイスによる『前世療法』がベストセラーとなり、多くの欧米ニューエイジャーの前世探しに火をつけることになりました。現在、アメリカ人の約4分の1が輪廻転生を信じていると言われていいます。

日本にもこの退行催眠による前世療法が波及し、退行催眠を行うセラピストが徐々に増えています。昨年はテレビでも退行催眠の様子が放映されました。今や日本人の中にも、退行催眠によって前世を知りたい、前世のカルマによる病気を治すために前世療法を受けたい、と願う人が急増しています。

霊的な事柄に関心のある人々は、退行催眠は、前世を知る最も強力な方法であると考えてようになってきています。

日本の新新宗教（GLAや幸福の科学）でいわれる前世については、すでにニューズレター3号において言及しました。それらは事実から全く掛け離れていること、その大半が作り話に過ぎないことを指摘しました。そうした現在の新新宗教による余りにも程度の悪い前世探しと比べ、退行催眠によるそれは、比較にならないほど確実なもののように思われます。

ご存じのように、シルバーバーチなどの高級霊による霊界通信では、再生が事実であることを明らかにしています。退行催眠によって本当に自分の前世を知ることができるとするなら、それを受けてみたいと思うのは、人間の心理として当然のことでしょう。自分の前世を知ることには大きな魅力とロマンを感じるのは、ごく自然な人間の好奇心といってもよいでしょう。

もし退行催眠によって本当に前世を知ることができるとするのなら、それはスピリチュアリズムをさらに押し進めることになるかもしれません。今アメリカを中心にブームを起こしている退行催眠を、スピリチュアリズムの立場ではどのように考えるべきでしょうか。もし退行催眠が本物でないとするなら、その理由を明確に示すことが、私達スピリチュアリストとしての責任ということになります。

ブライアン・ワイスの『前世療法』

—— 退行催眠による前世探しブームの火付け役

現在のアメリカにおけるニューエイジの「退行催眠」や「前世療法」の火付け役を演じたのが、米国フロリダの精神科医ブライアン・ワイスです。ワイスの著した『前世療法』は米国でベストセラーになり、翻訳されて日本にも紹介されています。シャーリー・マクレーンは、チャネラーのリーディングによって前世(?)を明らかにされましたが、ワイスは学者の立場で、「退行催眠」によって他人の前世を明らかにしようとしています。

1982年、ワイスがキャサリンという精神障害に悩む患者を催眠療法で治療している時、年齢を溯らせる具体的な指示の代わりに、ついうっかり次のような指示を与えてしまいました。「あなたの症状の原因となった時期まで戻ってください」すると彼女は、4千年前の中近東の過去世に戻ってしまったのです。そして彼女は、当時の名前はもちろん、風俗や日常生活に至るまで詳しく思い出しました。そしてその日の退行催眠では、キャサリンはさらに二つの過去世(一つは18世紀のスペインでの売春婦、もう一つはギリシア人女性)を思い出しました。

それまで前世とか輪廻転生といった現象について考えたことのなかったワイスは、当然のことながら仰天し動揺します。その状況をどうしても信じてことができずでした。しかし不思議なことに、それまでの長期にわたる治療では治らなかったキャサリンの症状が、その時から急激に良くなり始めたのです。

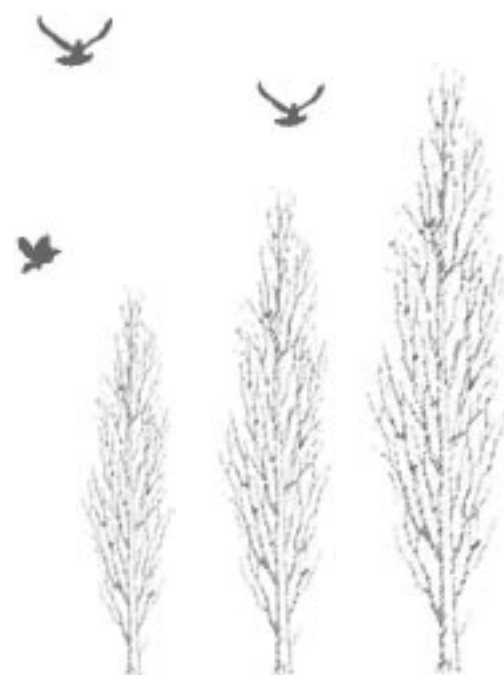
ワイスはキャサリンに対して、繰り返し催眠を試みます。その度にキャサリンは、異なる過去世へと戻って行きました。こうした現実を前にして、ワイスの懐疑主義も徐々に消え、前世の存在を受け入れるようになります。4、5回目の退行催眠中に、マスター達(あの世にいる霊達)がキャサリンを通じてメッセージを送ってきました。こうしてキャサリンは、チャネラー(霊界通信の霊媒)としての能力を発揮することになります。

その後1984年までに、キャサリンは12の過去世を思い出します。そして、それらの記憶が蘇る

たびごとに彼女の病気は回復に向かい、やがて完治することになります。その時マスターが、「我々がお前に話しかけるのもこれが最後だ。これからはお前は自分の直感で学ばなければならない」との通告をしてきます。そして、「もうこれ以上の啓示は与えない」というマスターの言葉どおり、あの世からの通信はなくなります。

その後も、ワイスは依然として退行催眠を続け、現在に至っています。彼のこれまでの催眠治療の数は三千例以上にも及んでいます。ワイスは、患者の多くは過去世を思い出すことによって、病気が癒されたと言います。このように「退行催眠」によって過去世を思い出させ、それによって現在に影響を及ぼしている悪いカルマを消滅させ病気を治すこと——これを「前世療法」と言います。

ワイスの著書『前世療法』には、退行催眠によって思い出したとされる過去世の多くの実例が、実にリアルに描かれています。名前、時代、場所、出来事など、生き生きと鮮やかに語られています。ワイスの話がそのまま事実であるならば、誰もが、自分もぜひ退行催眠によって過去世を知ってみたいと思うようになることでしょう。以上が、ワイスによる『前世療法』の概要です。



イアン・スティーヴンソンの前世の研究

前世研究にたずさわるアメリカ人科学者として、ブライアン・ワイズと並んでその名が広く知られているのが、イアン・スティーヴンソンです。イアン・スティーヴンソンはヴァージニア大学医学部精神科の教授で、その厳格な前世の研究によって、現在世界中から最も高い信頼が寄せられています。スティーヴンソンの著書は、日本語にも翻訳されています。（『前世を記憶する子どもたち』『前世の言葉を話す人々』『生まれ変わりの刻印』）これらの本によって、スティーヴンソンの厳密な研究手順や分析方法を知ることができます。現在の前世に関する研究としては、スティーヴンソンの右に出る者はなく、彼は申し分なく世界の最高レベルにあるとすることができます。

その彼は、『前世を記憶する子どもたち』の中で、退行催眠による前世探求を鋭く批判しています。スティーヴンソンはその本の前書きで——「薬物を使うにせよ瞑想や催眠を利用するにせよ、前世の記憶を意図的に探り出そうとすることには、あえて反対の立場を取りたいと思う。遺憾ながら催眠の専門家の中には、催眠を使えば誰でも前世の記憶を蘇らせることができるし、それにより大きな治療効果が上がるはずだと主張するか、そう受け取れる発言をしている者もある。私としては、心得違いの催眠ブームを……特に前世の記憶を探り出す確実な方法だとして催眠が用いられている状況を、何とか終息させたいと考えている」と述べています。

スティーヴンソンの前世研究は、まず厳密な面接調査から始まります。前世の記憶を語る子供がいるとの情報が入れば、さっそく現地に向向いて面接調査を開始します。子供の語る話の内容が、他人や社会から入手されたものでないことをチェックし、さらに、その内容が事実であるかどうかを確認します。スティーヴンソンは、刑事事件に取り組む現代の捜査官さながらの手順を踏んで調査を進めます。再生者本人（子供）については言うまでもなく、それを証明する人々に対しての信頼性もチェックします。また“前世の人格”を知る人間に対して面接調査を

し、本人の語る前世の内容の裏付け調査をします。そして前世者に関するあらゆる資料・記録（病院カルテ、検死調査書、死亡届など）を収集します。

こうした全ての面からの厳しい調査によって、子供の語る話が事実であることが明らかにされると、次にその情報自体をさまざまな角度から分析することになります。そして前世の記憶としての信憑性に少しでも欠ける可能性のあるものを、片っ端から消去していきます。

例えば、潜在意識による記憶のいたずらがその一つです。子供が何年か前に聞いた話や、他人から読んでもらった本の内容や、また、ずっと以前に見たテレビの内容が潜在意識の中にしまわれることがあります。その後、本人はそうしたことがあったことさえも忘れてしまいますが、何かの拍子にそれが顕在意識に出てくることがあります。すると、それを前世の記憶が蘇ってきたと錯覚してしまうのです。こうした潜在意識の関与する記憶は、前世の記憶とは言えません。また子供が、テレパシーによって“前世の人格”を知る人からその情報を取り入れるという可能性も考えられます。ゆえにそうしたサイキック・霊的能力が認められる子供の記憶は、前世のケースから除外されることになります。また、憑依現象が起こり、あの世の霊の記憶が子供を通して語られるということも考えられます。このケースも、前世を思い出したことにはならないので、当然除外されることになります。

このようにスティーヴンソンの調査と分析は細心・厳密をきわめ、前世の記憶と紛らわしいものは全て排除され進められていきます。そうした厳しい条件をパスしたもののだけが、再生のケースの可能性があるとされるのです。彼は前世の研究対象を子供に限定していますが、それは前世の記憶を語るという子供の大半が、10歳までにその記憶を失うという事実があるからです。また社会と触れ合う時間が多ければ多いほど、外部から、前世とは無関係なこの世の情報が潜在意識にインプットされる可能性が大きくなるからです。そのためスティーヴンソンは、大人が何らかのきっかけで前世の記憶を思い出したというようなケースが生じても、そうしたものをあま

り重要視しません。

さて、ここで見逃してはならない大切なことは、このように厳格な研究手順をふむスティーヴンソンが、（先に述べたように）退行催眠による前世の記憶を信頼できないものとしているということです。そして、それについての明確な理由をあげていません。スティーヴンソン自身も自ら退行催眠を行い、その体験をふまえて、退行催眠の問題点を明らかにしています。（これについては、『前世を記憶する子どもたち』の第3章に詳しく説明されています。）

催眠下では、被術者の精神は極度に集中状態におかれ、施術者の指示に反抗しがたくなります。例えば、「あなたの症状の原因となっている前世に戻りなさい」とか、「もっともっと時代を溯りなさい」といった指示が与えられると、潜在意識は何とかして、それに従った答えを出さなければならないような、切羽詰まった状態におかれます。その結果、潜在意識の中にあるあらゆる情報を動員して、それらしい「前世の人格」を作り上げることになります。施術者の指示に合わせて、事実からほど遠い、フィクション・ストーリーを作ることになります。これが催眠術の特色である創作性であり演出性なのです。

「あなたは“蝶”になりました」という強い暗示を与えられると、被術者は自分の両腕を蝶の羽のように動かし、「今、花畑の中を気持ちよく飛んでいます」などと言うようになります。皆さんも一度くらいは、そうした催眠術の実演をテレビでご覧になったことがあると思います。その時、催眠をかけられた本人は、実際に自分が蝶であるかのような気持ちになっています。その間は自分が人間であるということを忘れ、蝶そのものになっているのです。こうした“創作性・演出性”が、催眠下では極端に強くなるのです。催眠のメカニズムは現代の医学では解明されていませんが、催眠の持つそうした特性は、かなり明らかにされています。催眠によって作り上げられたフィクション・ストーリーは、そこで語られる内容を現実と照らし合わせてみれば、事実でないことは直ちに明らかになります。

もし、ある人が催眠状態で、「私は20年前、

愛知県岡崎市に住み、吉田花子という名前で、交通事故で死にました。そして今、この家の子供として再生しています。私の前世は、20年前に死んだ吉田花子です」と言ったとするなら、その再生譚が全くの作り話か事実であるかは、少し調べるだけで分かります。ところが、それが数百年、時には数千年以上昔の人間の話ということになると、よほどの有名人でない限り、その情報を確認することはほとんど不可能です。（そうは言っても実際には、話に出てくる名称や用語が、その時代のものと一致しないということなどから、フィクションであることが明らかにされるケースが多いのですが……）退行催眠によって思い出したとされる過去世とは、実はこうしたケースが大半なのです。

スティーヴンソンは、退行催眠下で過去世を語る人間にさらに催眠をかけ、いっそう深い催眠意識状態に誘導しました。そして先の退行催眠下での前世像は、書物やテレビや他から取り入れた情報をもとにして作り上げられたものであることを明らかにしました。こうして作られたフィクション人格は、語る本人自身にもそれらしく思えるし、その場面に合った生々しい感情（強い怒り・悲しみ・喜び・泣き叫び）まで引き起こすなど、一貫した人格性を示します。しかも催眠状態におかれれば、繰り返し何度でも、その人格を再現することができるのです。

スティーヴンソンは、退行催眠で呼び覚まされたという前世の記憶とは、そのほとんどが、こうした催眠状態でのフィクション性・演出性によるものであると言っています。人間の潜在意識については、現在の科学ではその実態は十分解明されてはいませんが、催眠下での“潜在意識”は、フィクション人格を作る能力があることだけは確かなのです。

ただしその一方で、スティーヴンソンは、催眠によるフィクション以外の例外的なケースの存在も認めています。それが低級霊による“憑依現象”です。彼は、バーンスタインの著書で取り上げられたブライディー・マーフィーの前世の記憶は、このケースではないかと述べています。

スピリチュアリズム関係では、アメリカ人医師ウィックランドの除霊治療がよく知られています。死

後も死んだことに気が付かない低級霊が地上人に憑依し続け、精神病を引き起こすことがあります。ウィックランドはそうした霊を、霊媒である妻に乗り移らせ、直接霊を説得して死を悟らせます。自分が死んだことに気が付くと、その霊は憑依状態・自縛状態から解き放たれ、霊的自由を得ることになります。そうした方法で、彼は迷える多くの霊を救い、同時に数多くの精神病患者を治してきました。その際、妻に乗り移った霊が語る時の様子や内容は、退行催眠での雰囲気や語られる内容と、全くといってよいほど同じなのです。こうしたことから、退行催眠で出現する前世の人格の一部は“憑依現象”によるものであることが窺えます。

スティーヴンソンの前世研究は、地上サイドにおける最高レベルのものと言ってもよいでしょう。すでに述べたように、その研究は、可能な限りの徹底した厳密な調査・分析によって進められてきました。そしてその過程で、退行催眠による前世の記憶は、そのほとんどが信頼できないものであることを明らかにしたのです。

さらに、スティーヴンソンの優れた見解について述べておきたいと思います。スピリチュアリズムの観点と照らし合わせた時、スティーヴンソンの研究の中で最も驚かされるのは——「ある人格がそっくりそのまま生まれ変わるといえることはない」という指摘です。これは私達スピリチュアリズムになじんでいる者にとっては、再生におけるインディビジュアリティとパーソナリティの問題であることがすぐに理解されます。

再生を理解するうえで極めて複雑で難解な問題が、「前世の何が再生するのか」ということでした。シルバークーチは、地上において表現されるパーソナリティが次の再生時にそのまま現れることはないと明言しています。再生するのは、パーソナリティよりもっと大きな自我（インディビジュアリティ）の別の部分であると言うのです。そのことは地上サイドから見れば、全く別のパーソナリティ（地上の人物像）が現れるということなのです。考えようによっては、地上人が思い描くような再生はない、とい

うことなのです。しかも現実の再生には、さらに複雑な要素が加わります。それが、「類魂のメンバー（部分）としての再生」という一面です。幸いなことに私達は、シルバークーチやマイヤースなどの霊界通信によって、その複雑な再生の実態を、さまざまな角度から眺めることができます。そして再生とは、一般の人々がとかく考えるような、同一人物像（同一人格）の再現ではないということを、はっきりと知ることができました。

退行催眠によって思い出したとされる前世像は、明らかに同一人物像（パーソナリティ）としてのものであり、同一人物としての前世が、まるで小説の主人公のように描かれています。しかし現実には、そうした前世はないのです。今、私（自分）として自覚し意識している私と、前世の私（としての人物像）は違うのです。

* 今、私達も持っている「私という意識・自覚」は、過去にも未来にも存在しません。つまり、今の「私という意識」だけを基準に見れば、過去世はなかったということです。今現在、私として自覚している存在は、過去に地上で生活していたことはないのです。このように地上サイドの視点から見ると、「私という意識・自覚」の連続性がないため、再生はないと言えます。

しかし、それを霊界サイドの視点、インディビジュアリティという全体をふまえた観点から見ると、再生はあるということになります。つまり、インディビジュアリティとしての私の一部が地上に出現するということです。この観点から見れば、過去と、現在と、未来の“地上の存在”に、一貫した連続性があることになります。このように、霊界での視点に立ってはじめて、再生があり、前世があると言えるのです。



さて、スティーヴンソンの見解は、厳密にはスピリチュアリズムと全く同じではないにせよ、個性と人格の区別を明確にし、現在の人格がそのまま再生するのではないということを明らかにしています——「私（スティーヴンソン）は、一つの人格がそっくりそのまま生まれ変わり得るといふ言い方は避けてきた。そのような形での生まれ変わりが起こり得ることを示唆する証拠は存在しないからである。実際に生まれ変わるかもしれないのは、直前の人格および、それ以前に繰り返された過去世の人格に由来する『個性』なのである」と述べています。（『前世を記憶する子どもたち』）霊界通信にも匹敵する、スティーヴンソンの洞察の深さには驚きを禁じ得ません。

シルバーバーチの退行催眠に対する見解

『シルバーバーチの霊訓（10巻）』には、退行催眠に対するシルバーバーチの見解が示されています。結論を言うと、シルバーバーチは、退行催眠によって前世を知ることはできないと述べています。退行催眠には信頼性を置くことはできない、退行催眠による前世は事実ではないとしています。その理由として、シルバーバーチは、次のような点をあげています。

① 催眠術の基本は“暗示性”にあり、被術者は必ずしも施術者の暗示どおりに反応しているとは限らない。（「前世を思い出さない」という指示を出しても、被術者が本当に前世のことを語っているかどうかは分からないということです。）

② 人間の精神には莫大な可能性が秘められており、“創造力や潜在的願望”によって過去世の人物像が作られる。（これはスティーヴンソンが、催眠下においては、潜在意識はそれまでの情報を駆使してフィクション的前世譚や前世人格を作り上げると言っているのと同じことを指しています。）

③ 霊による“憑依”の可能性はある。その場合、語られているのは憑依霊の記憶であって、本人の前

世の記憶ではない。

④ 催眠中に“幽体離脱”が起こり、その間の一連の記憶が印象づけられて語られることがある。これは本人の前世の記憶ではない。

シルバーバーチはこうした理由をあげ、退行催眠によって前世の記憶を思い出すことはほとんど不可能であると言うのです。「いわゆる催眠術による遡及（退行）は頼りにならないと考えます」と述べています。シルバーバーチは、スティーヴンソンが取り上げたケース以外に、「睡眠中の幽体離脱」という別の可能性も指摘しています。

さて退行催眠のような形で前世を思い出すことはないということになれば、実際には、どのようにして前世の記憶は引き出されるのでしょうか。シルバーバーチなどの高級霊は、これについてどのように言っているのでしょうか。

シルバーバーチは、地上人が前世を思い出す可能性としては、「せいぜい前世とおぼしきものを引き出すことができる程度に過ぎない」と述べています。また、「前世については一瞬のひらめきの中で垣間見るだけ」とも言っています。つまりシルバーバーチの言葉によれば、地上人が知ることでできる前世の実情は、退行催眠で小説風に描かれる一人の人間の前世像とは、あまりにも掛け離れているのです。『霊の書』（当サークル発行『スピリチュアリズムの真髄—思想編』）の中で、聖ルイは「神がその無限の叡知によって人間に全てを知ることができないように、また知らせないようになっているのです……過去世のことを忘れているからこそ自分を確保できているのです」と述べています。このように高級霊は、自分の前世が何であったのかを知ろうとすることの無意味さを強調しています。

自分の前世や背後霊を知りたいという願望の本音には、自分が立派であることを少しでも確信したいという見栄が潜んでいます。これは、家柄、財産、学歴などを自慢するのと同じレベルのことなのです。地上にいる以上、私達はもっと肝心なことに意識と

エネルギーを向けるべきです。死ねば誰もが、自分の前世を知ることができるようになります。率直に言って、前世や背後霊にこだわる人間に限って、内省的でないのが実情です。

また現実の問題（人間関係の不和など）の原因を何もかも前世に結び付けることは、明らかに間違っています。自分の責任をタナに上げて、単に責任転嫁をしていることが多いのです。それは、地上に生まれたことの意義・目的を忘れていることです。地上にいる私達は、地上人生において苦しみや困難を乗り越えた時に、はじめて過去世のカルマを消滅させることができるようになっていきます。安直なカルマ消滅の方法はありません。地上ならではの苦しみや困難から早く逃れたいと退行催眠に期待することは、“靈的摂理”からの大きな逸脱なのです。

ここでぜひ指摘しておきたいのは、地上の人間は再生というものを、今の自分にはない一種の栄光に憧れる気持ちから信じている場合が多いということです。人間世界でいうところの“劣等感”です。現在の自分の身の上がいくらみじめでも、かつての前世では高貴な身の上だったのだと信じることによって慰めを得ようとするのです。

〈シルバーバーチの靈訓10・125〉

次号では、引き続き「退行催眠」と「前世療法」について述べていきます。ブライアン・ワイスの『前世療法』と飯田史彦氏の『生きがいの創造』を検討し、問題点を取り上げることにします。

今回のテーマについては、やや堅苦しいタッチになっており、理解しにくい点も多いと思います。しかし、将来、スピリチュアリズムがニューエイジをリードし導いていく立場にあることを考えた時に、きわめて重要なポイントとなるため、あえてこうした形で書き表しました。



もう一度、スピリチュアリズムの大原則と全体像の確認を！

スピリチュアリズムの全体像を、もう一度確認してみましょう。

高級霊による史上最大のビッグ・プロジェクト

スピリチュアリズムは、今日、欧米や日本で流行しているニューエイジや精神世界ムーブメントとは全く次元が異なるものです。まず、スピリチュアリズムは地上サイドから始まったものではないことを、しっかりと理解しておかなければなりません。スピリチュアリズムとは、霊界の高級霊団によって直接おこされた地上人類救済のための一大事業です。そして、それは地上においては、高級霊が働きかけるための唯一の足場なのです。スピリチュアリズムは霊界の高級霊団によって組織された、人類史上はじめての地球規模の大プロジェクトです。人類が地球上に誕生して以来、何十万年という長い時がたっていますが、その中で最大規模の大事業が、今 はじめて、霊界の高級霊団によって進められているのです。かつてのナザレ人イエスを頂点として、地球に係わる何百億という高級霊が一丸となって、この大事業を推進しています。

高級霊団によるこの大事業は、地上の人類を救済するために、霊界の最上層において詳細に計画・立案されました。その完璧な計画に基づいて、地球上への働きかけがなされているのです。高級霊の働きかけの最大の目的は、地上に「霊的真理」をもたらすことです。その霊的真理は、スピリチュアリズムを通して人類に伝えられるようになっていきます。高級霊団の霊的真理を伝えるための働きかけは、「スピリチュアリズム」という一点の足場に凝縮して向けられているのです。そのため高級霊団の地上における計画は、スピリチュアリズムを中心に展開することになります。この意味で地球上で、スピリチュアリズム以上に高級霊団の意志をストレートに反映しているものはないのです。

また、スピリチュアリズムとは、「霊界中心主義・高級霊中心主義」ということができます。私達は現在地上で生活していますが、スピリチュアリズムを体現するためには（スピリチュアリストとして生きるためには）、自分という存在の中心点を霊界におくことが必要です。肉体は地上にあっても、心は霊界の一員としての立場に立つということです。すべての物事を霊的視点から眺め判断し、高級霊を手本として行動するのです。そして霊界の人々と心を合わせ道具として地上に働きかける——霊界と一緒にあって地上に手を差し伸べるということです。このような立場にあるのは、スピリチュアリズム以外にはありません。

それに対し、地上の宗教やニューエイジは、「地上中心主義・人間中心主義」ということになりません。霊界への興味・関心を持っているものの、それはどこまでも地上サイドに立ってのものなのです。地上から霊界を見上げる（仰ぐ）——地上から霊界に手を差し出すということです。

このように、スピリチュアリズムと他の宗教やニューエイジでは、拠って立つところが根本的に違っているのです。



皆さんは今、霊界での審議会で用意された叡知がこの私を通して届けられるのをお聞きになっていらっしゃるのです。

〈愛の摂理・244〉

その計画の推進は、皆さんの想像も及ばないほどの協調体制で行われております。背後の組織は途方もなく巨大であり、細かいところまで見事な配慮がなされております。すべてに計画性があります。そうした計画のもとに霊界の扉が開かれたのです。このたび開かれた扉は二度と閉じられることはありません。

〈愛の力・94〉

これは大変な仕事です。これを正当な手段で遂行していくことによって、私たちもそして皆さんも、真の意味での大霊の道具となることができるのです。地上世界は“下”からでなく“上”から支配されているのです。

〈愛の力・167〉

私の背後には延々と幾重にも連なる霊団が控え、完全なる意志の統一のもとに、一丸となって臨んでおります。

〈不滅の真理・29〉

明るい地球の未来 ――すでに軌道にのった高級霊界の計画

喜ばしいことに、こうした地球に対する計画はすでに軌道にのり、もはや後退することはありません。現時点では地球上のすみずみにまで、高級霊界の影響が及ぶようになっています。今後、霊的真理は時間の経過とともに、確実に地球上にくまなく普及していくのです。私達の知らないうちに、霊界の人々の働きかけによって、地球の将来は良い方向に決定づけられたのです。

ゆえに私達は、現在地上で騒がれているような“終末論”を心配したり、地球の未来に不安を抱かせるような情報に左右される必要はありません。遅かれ早かれ、高級霊団の計画は間違いなく地球において実現するのです。私達は幸いにも、そうした明るい地球の未来を教えられています。

基盤はすでに出来上がっているのです。何年も前から、その基盤づくりはこちらの世界で終わっているのです。苦痛は伴いながらも、ゆっくと各界の名士あるいは名もなき男女が、永遠の霊の実在の証言に立ち上がり、神の計画の一刻も早い実現のために刻苦したのです。新しい世界はかならず実現します。

〈不滅の真理・127〉

私は、できることなら霊的ビジョンがどうなっているかをお見せしたいものだと思います。そうすれば、霊の世界に存在する複雑・微妙な組織と、計画が立案され地上の各国に影響力が行使されていく、その背景に行きわたる配慮、絶妙ともいべき配剤を、目の当たりにすることができるのですが……

〈愛の力・129〉

現在の地球上の問題を“霊的視点”から見ると

ところがその一方で、現在の地球上には悲惨な問題が山積しています。毎日、暗く絶望的なニュースばかりが報道されています。そのため、本当にこれで地球は良い方向に進んでいるのかしらと思ってしまう。しかし霊界においては、地上天国に向けての計画が着々と進められているのです。今、地球上で騒がれている出来事も、霊的に見ればさして深刻な問題ではありません。日本の将来を左右しかねないような重大な出来事も、霊的には特別大きな問題ではありません。今後、日本の経済がさらに悪化したとしても、そして仮に世界恐慌が起きるような事態を迎えたとしても、それは地上人類の霊的発展にとって本質的なマイナスとはなりません。

現在、地球上に生じているさまざまな問題は、概して物質世界における全体のバランスを取るための一時的な現象にすぎません。それは、物質への偏り過ぎというアンバランスを修正するために引き起こされるプロセスであったり、人類が霊的方向に踏み出すための必要な苦しみの道なのです。「霊的視点」から見た時、日本経済のバブルが弾けたことは、日本人の“霊性”にとってむしろ良いことでした。こうした事態にでもならない限り、異常な物質至上主

義・経済至上主義に対してブレーキはかからなかったし、冷静な反省もできなかったことでしょう。

地上人類にとって「霊的成長」こそが最も重要であるとの観点に立てば、これから生じてくる世界規模の問題も、良い方向に向かうための不可欠な苦しみであると言えます。飽食から生じた病気には、断食療法というショック療法が最も効果的です。経済不況もそれと同じことなのです。拡大再生産という無限の経済拡大が、人類の本能性・物質欲をいっそう煽るだけのものであることを考えれば、経済不況というショックこそ、本当はありがたいものなのです。経済規模が縮小されることは、人類にとって決して悪いことではありません。

日本のように物質的に恵まれた国が、自らその富を持たざる国に分配できないとするなら、すでにそのこと自体が“霊的摂理”に反しています。特定の個人や国に富が集まるのは、その富を他の持たざる人達・国々に与えるためなのです。自分達だけが豊かになるために、お金が入ってきているわけではありません。地球規模における貧富の差は、いつかは完全になくさなければなりません。それにはまず、富裕な国が恵まれない国々の経済的自立と発展のために、積極的に自国の富を用いることが必要です。それが同じ地球上に存在する国としての義務であり、霊的真理にそった国の在り方なのです。

もし、そうした国家的な奉仕が自発的にできない時は、いやおうなく富を放出せざるを得ないような動きが生じるようになります。そうした動きは大きな視点から見れば、消極的ではあっても国レベルでの一種の奉仕（愛の行為）に駆り出されることで良いことなのです。日本人にとっては苦しくとも、恵まれない外国人にとって恵みであるとするなら、それは結局、日本人にとって良いことになるのです。日本国民に質素な生活を強いて、その分を貧しい海外に与えてこそ、日本の将来的繁栄は約束されます。それが“霊的摂理”にそった国の繁栄の方法であり、そのように仕向けるのが本来の政治家の役割なのです。

そうした観点に立って見る時、現在、世界中を巻き込んで混乱におとしめている米国のマネーゲーム

は、物質主義・拝金主義の極まった姿であると言えます。世界中の国々を苦しめても、米国一国だけの繁栄を目指す“エゴイズム”の極限的異常さは、いづれ大きなツケとなって米国民の上に返ることになるでしょう。近い将来における、米国の没落と破滅を暗示しています。

スピリチュアリズムは地上における“霊的中心点”

地球上の人類にとって最も深刻で悲惨な問題は、大半の人間の魂が物質に閉じ込められ窒息しかけているということです。「物質主義」とそこから派生する「利己主義」が地球上を支配し、人々の魂の成長は完全にながしにされています。地上人類の霊的成長を阻んでいる地上の最大の“ガン”とは、この物質主義と利己主義です。地球上のすべての問題はこの二つに起因します。そして、この二つの地上のガンを根本から打ち砕くことができるのは、「霊的真理」以外にはないのです。

霊的真理を地上にもたらすという高級霊界の働きかけは、スピリチュアリズムにストレートに向けられています。スピリチュアリズムは地上において最も霊界に近い立場にあるため、霊界からの働きかけは、スピリチュアリズムを頂点にして展開していきます。霊界からの働きかけは地上のあらゆる分野に及んでいますが、その中で、スピリチュアリズムは特別な立場に立っているのです。



地球浄化の一環として私たちが携わっているのは、物欲第一主義の打破です。

これは言わば地球のガンです。利己主義・どん欲・強欲・暴力——これらはみな物欲第一主義の副産物です。これらを無くし、地上の子らが精神的にも霊的にも豊かさを享受して、互いに協調し合える世界を築くことが目的です。

〈最後の啓示・59〉

あなた方は地上の混乱や戦争、悲劇や憎しみ合いの根源である物欲第一主義が生み出す見苦しい悪感情のかずかず——どん欲・強欲・愚かしい利己主義等々——との大々的な闘争にたずさわっているのです。

〈最後の啓示・106〉

スピリチュアリズムは無条件に、地上における霊的な中心的位置に立たされています。三角錐の頂点にスピリチュアリズムがあり、その下にニューエイジや他の宗教が位置しています。そしてニューエイジも他の精神世界ムーブメントも、無意識のうち、三角錐の頂点にあるスピリチュアリズムを目指ようになっていきます。それは高級霊による霊界通信によって、霊的真理がより完璧な形でスピリチュアリズムにもたらされているからです。スピリチュアリズムを通じて地上に与えられた霊的真理こそ、地球上における最も価値あるものです。そして地上人の霊的成長にとって必要不可欠なものなのです。スピリチュアリズムを通じて霊的真理を地上にもたらし広めることが、霊界の大事業・大計画の目的でした。そしてその計画は、すでにレールにのって順調に進んでいます。時間の経過とともに、霊的真理は地球上のすみずみにまで行きわたり、すべての宗教・思想に取って代ることになります。スピリチュアリズムによって示された霊的真理は、いずれ地球上の人類の“常識”となるのです。

大きな仕事が待ち受けています。背後には物質界のあらゆる勢力を結集してもなお太刀打ちできない強大な力が控えていることを忘れずに励んでください。何一つ恐れるものではありません。

〈最後の啓示・106〉

スピリチュアリズムに携わる私達の立場

スピリチュアリズムに携わる私達は、今述べたような事の重大性を強く自覚していなければなりません。一人一人が、すでに歴史的な中心的立場に立っているのです。そして同時に、現在、地球上における最大の栄光に浴しているということです。今この時、高級霊団の総力上げての活動が、常に私達の周りで展開していることを忘れてはなりません。私達は霊団と同一のメンバーであり、別々に活動しているのではなく、一緒になって地上に働きかけているのです。霊界と力を合わせ、地上において最も価値ある霊的業を遂行し、地球の歴史を変えつつあるのです。

私達は、地上のいかなる宗教者や霊能者よりも大きな使命を担っています。その使命の重大さは想像を超えたものです。しかし、そうした重要な立場に立つ私達は、それにふさわしい内容を持っていると言えるでしょうか。自分自身の内容——特に自分の清らかさに自信を持つことのできる人はいないはずです。また世の中には、優れた能力を持った人達が大量にいます。それなのに、背負い切れないほどの大きな使命が真っ先に与えられているのです。

私達一人一人を見ると、あまりにも足りない点ばかりが目につきます。その足りなさゆえ、自信を失いかけそうになることもあります。しかし私達には、高級霊団の一員としてともに働けるという特権が与えられています。霊界の多くの人々の援助を得ることができるという、他の人々にはない、特別な資格が与えられています。個人としては力はありませんが、霊界の人々の力を活用することができるという特別な立場におかれています。そのため状況によっては“百人力”というようなことが、実際に可能となるのです。

そうした霊界の人々の援助を得るためには、霊界の人々が安心して用いることができるような内容を持っていなければなりません。霊界の人々が働きかけることができるような状況をつくれるかどうかということです。それによって、私達の地上における貢献度は大きく左右されます。高級霊の援助を得るためには、ひたすら自分のエゴ的思いを払拭し、た

だ霊界の道具として純粹に歩むことが必要です。高級霊の良き道具となるためには、自分の生活を正し、心身を清く保つ努力を欠かしてはなりません。絶えず自分の心を反省し、傲慢な思いがなかったかどうかを、厳しくチェックしていかなければなりません。こうした日々の地道な霊的克己の努力をしてこそ、スピリチュアリズムという人類歴史最大のプロジェクトに参加する者としての義務を果たすことができるようになるのです。

「たった一人の人間のすることです。見た目にはたった一人です。が、その背後には、自分を役立てたいとの願望に燃える者にかならず授けられる強大な霊力が控えております。

〈愛の力・53〉

「実はこのことが一ばん大切なのですが——高級な指導霊の協力を得ることができるように、人間性を磨くことが大切である……

〈愛の力・108〉



スピリチュアリズムの目的は地球の霊的浄化

霊界の高級霊団が地球に向けて働きかけるのは、地球上の人類を救済するためです。そのことは別の角度から見れば、地上を霊的に浄化することです。物質と肉体の檻の中に閉じ込められ、霊的な息ができなくなってしまった地上人の魂を、霊的真理によって生き返らせることが霊界の人々の目的です。そして霊的に新生した人間が徐々に増えることによって、地球は霊的成長のための生活環境に変化していきます。霊的真理に基づく政治・社会制度もできていくようになることでしょう。これまで地上人類がつくり出してきたのは物質中心的・利己主義的世界であり、まさに本能的欲望が支配する“地上地獄”でした。そうした地上社会が、霊を優位とする人間が増えることによって、根本から変化していくのです。一人一人の「霊的新生」から地球の浄化が始まり、それがさらに広がることによって、地球は全体として霊的に浄化されるようになるのです。これが地上の「霊性化・霊的浄化」ということです。

スピリチュアリズムとは、霊的真理に基づく信仰です

スピリチュアリズムは、従来の地上の宗教組織を徹底して批判してきました。本来宗教とは、神の道具として人類を霊的に新生させ、霊的成長を促すはずのものでした。しかし、そうした目的に反して地上の宗教は、人々を霊的成長の道から遠ざけ、物質・肉欲の中に閉じ込めてしまいました。人類の霊的成長に寄与するどころか、常に障害となってきたのです。地上には、高級霊の目から見て合格点のつく宗教組織は一つとして存在しません。そのため霊界から厳しく糾弾されてきたのです。

さて私達は霊訓を通じて、そうしたスピリチュアリズムの宗教に対する批判を何度も耳にしてきたため、つい、スピリチュアリズムは信仰ではないと思いがちです。確かにスピリチュアリズムはこの世という宗教ではありません。しかし、スピリチュアリズムは正真正銘の信仰です。地上にこれまで存在した信仰の中で、最も次元の高い信仰なのです。

シルバーバーチはよく、実践の重要性について述

べています。何を信じているかより、どんな生き方
をしているのか、実際に何をしているのかが重要で
あると言います。これはスピリチュアリズムが、ま
さに靈的真理の実践の道であること——地上的な言
い方をすれば「信仰」であることを意味していま
す。もし靈的真理を知りつつも、毎日の生活がそれ
とは無関係な歩みであるなら、スピリチュアリスト
とは言えないということです。靈的真理が知識レベ
ル・学問レベルにとどまり、信仰実践にまで至って
いない人、人生のすべてが靈的真理の実践になっ
ていない人は問題です。

地上人類がみずからの力でみずからを救い、
内在する神性を発揮するようになるために
は、そうした単純な靈的真理を日常生活にお
いて実践する以外にないからです。

〈不滅の真理・96〉

スピリチュアリズムは、靈的真理に信仰を積み 上げる生き方です

シルバークーチはよく、「知識に信仰を付け加え
なさい」と言います。この言葉はスピリチュアリズ
ムが、靈的真理に基づく信仰、靈的真理を土台と
した信仰であることを意味しています。スピリチュ
アリズムは信仰として、私達の中に根付かなけれ
ばなりません。従来の上の宗教は靈的真理に基づ
く信仰ではなかったために、どれだけ純粋に打ち
込んで正しい信仰をつくり上げることができませ
んでした。それどころか一生懸命にすればするほ
ど靈的真理からズレることになり、狂信・盲信と
いう結果に終わってしまいました。その点、スピ
リチュアリズムはどれだけ打ち込んでも狂信・盲
信になることはなく、ますます純粋さが増し加
わっていくようになります。

靈的事実を土台として生まれた信仰は、い
かなる嵐が吹いてもビクともしません。

〈愛の摂理・163〉

そこで私は、知識の上に信仰を加えなさいと申
し上げるのです。理性に裏打ちされた信仰、知
識を基盤とした信仰は立派です。

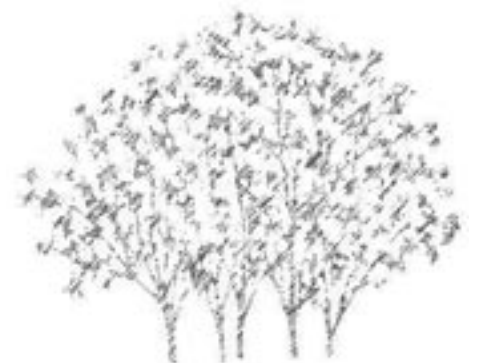
〈最後の啓示・194〉

私達の中には、靈的真理を学んだものの、それが
人生かけての信仰にまで至っていない人達が多く見
られます。いつまでも学問のレベルに踏みとどま
たままにいる人もいます。どれほど靈的真理を学
び多くの靈的知識に通じていたとしても、実践に
まで至らなければ、それは単なる“エゴ”になっ
てしまいます。現在のスピリチュアリストの中
には、残念ながら、こういう人が多いように思われ
ます。靈的真理という最高の知識を手にしたこと
が、その人の自己顕示欲と結び付くと、もはや
どうにもならない弊害を生み出すことになりま
す。靈的真理を何も知らない人よりも、人間性
において劣ることになってしまいます。

繰り返しますが、スピリチュアリズムは、これ
までの地上にはなかった全く新しい信仰です。そ
して最も次元の高い、最も純粋で、真に魂を高
める信仰実践なのです。

^{おし}訓えは十分に揃っているのです。今必要な
は、その実行者です。

〈愛の力・186〉



スピリチュアリズムは、キリスト教の“殉教”を超える純粋な信仰です

私達に与えられた靈的真理がこれまでの人類歴史上最高のものである以上、その実践は、人類歴史上最高次元の信仰でなければなりません。そうでないかぎり、高級靈界の目的とする“人類救済”は実現しないこととなります。スピリチュアリズムは、その深さ・純粋さ・情熱において、歴史上の最高レベルの信仰実践（靈的実践）でなければなりません。これまでの地上の宗教の中で、純粋さの点において最も優れていたのは、キリスト教に代表される“殉教”です。信仰のために生命を捨てる——スピリチュアリズムの信仰もまた当然そうでなければなりません。キリスト教によって示された信仰以下のレベルであってはならないのです。

私達が、スピリチュアリズムのために自分の人生・生命をすべて捧げるのは当然のことなのです。そうであってこそ、スピリチュアリズムははじめて“純粋な信仰”となります。地球上の全人類の命運を掛けた戦いの最中に、自分のことだけを考えたり自分のことを優先する人間を、靈界の人々は頼りにすることはできないでしょう。クリスチャンでさえ信仰のために生命を捨ててきたのに、それとは比較にならないほど重要な立場にある私達が、人生と生命を捧げないことは、靈界の人々の期待を根底から裏切ることになるのです。

幸いに年若くして靈的真理と出会った者は、靈的真理の普及を自分の人生の“ライフワーク”としなければなりません。この世における仕事は、真理普及のための手段であると位置付けすべきでしょう。

また年老いて靈的真理と出会った者も、地上の余生をすべて真理普及のために捧げようと決心しなければなりません。安穩とした隠居生活など望んでいてはならないのです。体の動くかぎり働き続け、病床にあっては祈り続け、地上におけるスピリチュアリズムのメンバーとして、最後の最後まで邁進しなければなりません。そうしてこそ死後ただちに、靈界の軍団の一員として、地上に向けて働き始めることができるようになるのです。

スピリチュアリズムの出発は、靈的真理を正しく理解すること

スピリチュアリズムが靈的真理に基づく信仰実践である以上、靈的真理を正しく理解することがその出発点となります。あまりにも当たり前のことで、いまさら何をと思われるかも知れませんが、実はこのことこそが、現在のスピリチュアリズムが抱えている大きな問題点の一つなのです。はっきりと言えば、靈訓を読んでいても、その内容を正しく理解している人が少ない、ということです。誰もが、自分はシルバーバーチを読んでいるからスピリチュアリズムについてよく知っていると思っています。しかし残念ながらそういう人達の多くが、靈的真理を正しく理解していないのが実情なのです。こうした言い方には、反発を感じられる方も多いでしょう。しかし事の重大性を考えると、厳しいこととは十分知りつつも、率直に指摘せざるを得ません。

シルバーバーチは、「スピリチュアリズムの最大の敵は、外部ではなく内部にいる——つまり、生半可な知識で全てを悟ったつもりでいる人たちが、往々にして最大の障害となっている」と述べています。（『新たなる啓示』ハート出版）

日本のスピリチュアリズムの内部から、スピリチュアリズムの敵は出て欲しくありません。これほど残念で悲しいことはありません。

スピリチュアリズムによって地上にもたらされた靈的真理は、高級靈界における知識の総結集したものです。それが靈界通信によって私達に示されたのです。ゆえにスピリチュアリズムによる靈的真理——特にシルバーバーチやインペレーター（『モーゼスの靈訓』の通信靈）、聖ルイ（『靈の書』の通信靈）といった特別な高級靈による靈界通信によって示された靈的真理は、人類史上、最高の叡知であり、人類の宝と言うべきものです。歴史上にも現在にも、これらの靈的真理に匹敵するものはありません。地上の宗教による教理や思想など、とうてい比較することさえできません。地上にある何十億、何百億冊という宗教書・思想書も、この靈的真理の前では色あせたものになってしまう。

地上の人間はとかく、難しい表現で書かれたものでないと、また理屈っぽく書かれたものでないと、内容がない・価値がないと考えがちです。霊的真理は決して難しい表現で語られることはありません。誰もが理解できるように分かりやすく説かれています。単純で分かりやすく、それでいて全てを包み込む最も深い内容を持っています。そのため理屈だけを追うことに意義を見出すような霊性の乏しい人には、その価値が分からないようになっていきます。まさに霊的真理を理解するのは霊的な感性であって、ある程度の霊的レベルにまで至っていないとできないことなのです。すでに皆さん方が、スピリチュアリズムにおける霊的真理を最高のものとして認めることができたという事実は、皆さん方の霊性が優れていたことを意味しています。

霊的真理は、スケール・深さ・正確さのどれをとっても、他の宗教の教えや現在の精神世界ムーブメント、ニューエイジの内容を寄せ付けません。唯一、聖書の福音書の一部が、これに匹敵するのみです。

もし、スピリチュアリズムの霊界通信・霊訓に触れながら、いまだにそれを他のものと対等に考えているとしたら、残念ながらその方は、霊的真理が分かっていないということです。スピリチュアリズムにおける霊的真理を他のものと横並びに考えるということ自体が、その人の真理の理解の乏しさを示しているのです。

人間が地上生活を生き抜き成長していくために必要な真理は、これ以上つけ加えるべきものは何ともありません。あとは真理をより深く理解すること、神とのつながり、および同胞とのつながりに関してより一層理解を深めることです。新たに申し上げることは何一つありません。

〈シルバーバーチ 12・219〉



さて先程のシルバーバーチの、「スピリチュアリズムの最大の敵は内部にいる」という言葉について述べてみたいと思います。この言葉は、すでにスピリチュアリズムの霊的真理を知った私達に向けて語られています。いまだスピリチュアリズムの価値が分からない人達に向けられているのではありません。シルバーバーチは真理を手にして私達に対して、「あなた方はスピリチュアリズムの敵になりかねない」と言っているのです。そしてその原因として、霊的真理を正しく理解していないことを指摘しています。せっかくスピリチュアリズムにまで至りつつも、スピリチュアリズムの敵になってしまうことほど悲劇はありません。霊界にとっても、これ以上の大きな損失はありません。霊界の高級霊にとっての最高の悲しみとは、スピリチュアリズムの敵になってしまうことです。私達はスピリチュアリズムの敵になるような事態に至らないために、何としても霊的真理を正確に理解しなければなりません。

さて、これまでスピリチュアリズムと自称される多くの方達を見て感じることは、霊訓を一生懸命読んでいるにもかかわらず、その理解が“自分流”であるということです。自分の感性和合う部分を中心として真理を理解し、それで良しとしています。傍から見ると、明らかに偏ってズレた理解をしているのですが、それが修正されることなく、その人のスピリチュアリズム観になってしまっているのです。

霊的真理を正しく理解しようとするならば、徹底して霊訓を読む必要があります。その上で、それらを体系化して全体の理解を図らなければなりません。そのためには何十回、何百回と繰り返し繰り返し読む必要があります。せっかく霊界から降ろされた霊的知識も、もし間違っ理解されてしまうなら何の意味もなさなくなります。口をすすぐような読み方で、霊的真理の全体を正確に把握することはとても不可能なのです。

実際に真理の全体を正しく理解するには、かなりのエネルギーと時間が必要とされます。そのため多くの人々が、それをなし得ないでいることも事実なのです。しかし、だからといって私達は、スピリチ

ュアリズムを正確に理解しないままで良しとするわけにはいきません。

*こうした実情を考慮して当サークルでは、『スピリチュアリズム入門』と『続スピリチュアリズム入門』を作成しました。これらの本の目的は今述べましたように、高級霊訓によって示された霊的真理の全体像（アウトライン）を理解していただくことにあります。霊訓を読む前の予備知識として、スピリチュアリズムの霊的知識の全体像を知っていただきたいということです。これらの本はあくまでも、霊訓を正しく理解するための手引書であって、霊訓に入る前のウォーミングアップのためのものです。私達の一番の願いとするところは、各自が直接霊訓を読み、日常生活においてそれを心の支えとし、霊的エネルギーを補給してほしいということです。そして時々これらの本を読み返し、スピリチュアリズムの霊的真理の全体像を再確認していただきたいと思っています。

また、この二冊の入門書にはそれ以外の目的もあります。それはスピリチュアリズムが霊的真理を土台とした信仰であること、そしてスピリチュアリズムの霊的真理は地上における最高のものであることを、しっかり理解していただくということです。

こうした目的をもって二冊の本を作成しました。将来、これらをたたき台にして、もっとすばらしい入門書をつくってくださるとするなら、喜び以外の何物でもありません。



霊的真理実践の真髄 “道具意識”

私達は、霊的真理の実践を通じてはじめて魂を成長させることができます。そのスピリチュアリズムの信仰実践の具体的内容については、これまでのニューズレターで述べてきました。それは霊主肉従の努力、苦しみの克服（甘受）、利他愛の実践、祈りという四つでした。さらにこの四つの内容は大きく、「自己克己・自己内省（自己コントロール）」と「利他愛の実践」という二つにまとめることができます。

このうちの利他愛の実践とは、自分のことより他人の幸せを優先すること、他人のために自己を犠牲にすることです。イエスは、「人のために生命を捨てることほど大きな愛はない」と言っています。これは、まさに利他愛のことを言っています。

自分のことを後回しにして、霊的真理の普及（最高の利他愛の実践）に自分のすべてを捧げ、自分の人生を神と霊界の導きに任せることは、別の言い方をすれば、「道具意識」を持つということです。地上において霊的真理を伝えることほど大きな愛の行為はありませんが、その愛が“真の利他愛”として実を結ぶためには、道具意識が不可欠です。

自らの立場を高級霊の道具と定めることによって、自分自身に栄光を帰することがなくなります。どこまで行っても付きまとう地上人の自己中心性と傲慢さは、自らを道具として位置付けすることにおいてのみ、初めて払拭することができるのです。それによって純粋な謙虚さを心に宿すことができるようになります。「霊界の道具」ということは、主役は霊界の人々であって、自分はそのお手伝いをさせていただき、使っていただくということです。そこには、一人よがりの力みも、不純で利己的な実績追求の野心もありません。すべては霊界と二人三脚でやることになるからです。道具意識のないところでは、たとえ他人への奉仕であっても、そこに傲慢さが忍び込んできます。そしてそれを拭き去ることができなくなります。良い結果ができれば、自分が優れていたからだと思いがちになってしまうのが、地上の人間の常なのです。しかし純粋な道具意識のあるところでは、全力を尽くしつつも、なお謙虚さを持ち続けることができるのです。

私達は、心掛け一つで霊的真理のメッセンジャーとなれることの重要性を忘れてはなりません。霊界総動員しての大事業の目的が、地上に霊的真理をもたらすという一点にあること、そして霊的真理が地上の人間にとって「最高の救い」となることを、決して忘れてはなりません。そして私達はそうした歴史的な仕事を、霊界の人々の「地上の道具」となって、一緒に進めていくということなのです。

霊の大軍の一員なのです。私たちの背後に、そしてさらにその向こうにも、たぶんあなた方には理解の及ばないほどの霊格を身につけた高級霊の集団が幾重にも連なって控えているのです。あなた方も、この私も、そして大事業に参加している者すべてが、そうした軍団の援助をうけることができるのです。唯一それを制約するものがあるとしたら、それはその人の受容力、吸収力の程度だけです。

〈最後の啓示・108〉

霊的真理の伝道は、地上における最高に価値ある行為

シルバーバーチは繰り返し、霊的真理を伝えることの重要性を強調しています。私達地上の人間にとって霊的真理の伝道は、何より重要で価値のある霊的实践です。「たった一人でも霊的真理を伝えることができたら、あなたの人生は無駄でなかったこととなります」——これはあるスピリチュアリズム・ヒーラーに向けてのシルバーバーチの言葉です。シルバーバーチの心霊治療観は、常識では全く考えられないような爆弾的内容を持っています。病気が治ることよりも、患者が霊的意識に目覚めることが大切であると言うのです。これは心霊治療は、どこまでも霊的真理普及の一つの手段にすぎないということの意味しています。

新興宗教による浄霊治療、いま流行しているヒーリングや気功治療では、病気が治ったことを誇張して宣伝します。彼らは病気が治ることだけに価値をおいています。そしてそれを自己宣伝の格好の材料とし、本人もたいそう立派なことをしているかのように思い込んでいます。

しかしスピリチュアリズムのヒーリングにおいては、病気が治るかどうかは、どちらでもよいことなのです。もっと重要なことは、ヒーリングを通じて相手の魂が高まるかどうかということなのです。この点で、スピリチュアリズムにおけるヒーリングと他のヒーリングは根本から違ってきます。

もしスピリチュアリズム・ヒーリングに係わりながら、いまだに表面上の治療実績だけにこだわったり、それを自慢するような人がいるとするなら、それはスピリチュアリズム・ヒーリングの本質を外れて、何の価値もないこの世のヒーラーと同じレベルに落ちているということです。霊的真理普及の手段としてのヒーリング以外にはする必要はありません。そうしたヒーリングは単に自己満足を増大させ、自分の心を傲慢にするだけなのです。スピリチュアリズムの霊的真理を知った人は、高級霊の願いからズレたようなヒーリングはやめるべきです。現代医学に見放された患者を治せる程度のヒーラーは巷に数多くいます。しかし、ヒーリングを霊的真理普及の手段とできるヒーラーはめったにいないのです。それゆえスピリチュアリズム・ヒーラーは、他のヒーラーと、その内容において根本的に違っていなければなりません。

心霊治療の目的はきわめて単純です。魂を目覚めさせること、これに尽きます。身体が症状が消えても魂が霊的なものに目覚めなかったら、その治療は失敗したことになります。反対に病気そのものは治っていなくとも、魂が目覚めて霊的なものに関心を抱くようになれば、その治療は成功したことになります。

〈最後の啓示・187〉



再度、伝道について述べますが、霊的真理を伝えるということは、ヒーリングにまさる霊的实践をしているということです。霊的真理を語れない100人のヒーラーよりも、ずっと重要で価値ある仕事をしているということです。空中浮遊するサイキッカーのどこがすばらしいのでしょうか。霊の声を聞けるという霊能者のどこが優れているのでしょうか。どちらでもよいような地上レベルの人生相談に応じる霊界通信に、何の価値があるのでしょうか。

霊的真理には、日常生活の中で生じる問題を解決するための答えがすべて示されています。それなのに霊界にお伺いを立てるといふのであれば、それは霊的真理が全く分かっていないか、スピリチュアリズムを逸脱したということ以外の何物でもありません。霊的真理が与えられているということの重要性が真に理解できていないのです。

あなた方が霊的真理を手にしたということは、人類が抱えるすべての問題を解くカギを手にしたことを意味します。

〈不滅の真理・125〉

私たちの説いている真理は人生のあらゆる面に応用が利くものです。宇宙のどこを探しても神の摂理の届かないところがないように、地上生活のどこを探しても、私たちの説く霊的真理の適用できない側面はありません。

〈不滅の真理・47〉

霊能力があることは、それ自体には何の価値もありません。ないどころか往々にして傲慢さを生み出し、その人の人間性を墮とせしめてしまうことが多いのです。霊能力は霊的真理普及の手段となって初めて価値を持つのです。それゆえ霊的真理を伝えられる私達の立場は、いかなるヒーラー・霊能者よりも重要であり、大きな使命が与えられているのです。



シルバーバーチより

忘れないでいただきたいのは、皆さん方のような地上での道具がなくては、私たちも何ものなし得ないということです。皆さんは私たちに闘いのための武具を供給してくださっているようなものなのです。皆さんの力をお借りする以外に地上には頼りにすべき手だてが何もありません。喜んで私たちに身をゆだねてくださる人以外に、道具とすべきものがないのです。

その道具が多すぎて困るということは決してありません。こちらの世界では、使用に耐えられる人物の出現を今か今かと待ちうけている霊がいくらでもいるのです。

私たちの方から皆さんを待ち望んでいるのです。皆さんが私たちを待ち望んでいるわけではありません。地上への降下を待ち望んでいる霊力には、その表現形式が無数にあります。種類も様式もおびただしい数があり、さらには、用意された通路に合わせて形態を変えます。

もっともっと多くの人材——これが私たちの大きな叫びです。いつでも自我を滅却する用意のできた、勇気と誠意と率直さにあふれた男女——霊力がふんだんに地上世界へ降下して人生を大霊の意図された通りに豊かさとしらと光輝にあふれたものにするためなら、いかなる犠牲をも厭わない人材がほしいのです。

私たちの仕事は、人生意気に感ず、の気概なくしては出来ない仕事です。その仕事の尊厳に誇りを覚えて全身全霊を打ち込むようではなくては成就できません。

〈愛の摂理・132〉

臓器移植について

先日、日本で初めての脳死患者からの「臓器移植」が実施され大きな話題となりました。ご存じのようにスピリチュアリズムは、臓器移植を良しとはしていません。この度の臓器提供者や医療関係者の誠意は認めるべきですが、臓器移植自体は霊的摂理から外れた行為です。霊的事実に対する無知から生じたものなのです。

臓器移植の根底には、死ねばすべて終わりであるという“唯物的思想”があります。その唯物思想が、肉体生命こそ最も大切であるという“肉体生命至上主義”をつくり出しています。そうした唯物生命観においては“死”は敗北であり、反対に少しでも肉体生命を永らえさせることは医学の勝利であるということになります。

それに対しスピリチュアリズムでは、肉体はどこまでも“霊”の地上における道具にすぎないと考えます。そして肉体生命に価値をおくことはありません。死は何としても避けるべき悪ではなく、それどころか霊本来の世界へ帰って行く喜ばしい時であると、正反対のとらえ方をします。

臓器移植のような不自然な手段を講じて肉体生命を永らえさせる必要は全くありません。人間にとって、わずかばかりの肉体生命の延長が重要なのではなく、魂の成長をなすことこそが重要なのです。臓器移植は、私達にとって無意味で不必要なものなのです。

世間では“脳死”が人間の死であるかどうかが大きな問題となりましたが、スピリチュアリズムの観点から見れば、実はそうしたことは取るに足りないことです。脳死であろうがなかろうが臓器移植はすべきではない、ということなのです。その意味で今回の脳死移植についての賛否両論は、ともに的外れな議論をしているということになります。

「臓器移植」についての、シルバーバーチの言葉を見てみましょう。

——**霊的観点から見て心臓移植をどう思われますか。**

「何事も動機が大切です。移植が純粋に生命を永らえさせるためである場合が確かにあります。が、実験を重ねていくうちに実験そのものの興味が先行して肝心の目的を忘れている場合があります……。

私は臓器の移植には賛成できません。また輸血も賛成できません。私の考えでは——私はあくまで私の個人的見解を述べるだけですが——肉体的生命の維持ということが唯一の目的であってはならないと思います。心に宿す考えが正しければ行為も正しく、したがって肉体も正常となります。

問題の解決は臓器の移植ではありません。本当の解決は各自が神の意図（摂理）にのっとった生き方をすることです。」

——**現段階では心臓移植はかならず失敗に終わると考えてよろしいでしょうか。**

「実験そのものは成功するケースもあると思います。ただ私が気がかりなのは、実験そのものが霊的にみて間違った方向へ進みつつあることです。その方向は人間の幸福のために献身すべき人が選ぶべき道ではないということです。現段階のやり方では健康は得られません。健康とは調和状態のことです。今の医学者のやっていることは一時的な部分品の継ぎ合わせにすぎません……。

人間という存在は身体と精神と霊の三位一体として創造されているのです。その三つは不可分のものです。置きかえはきかないのです。あなたはそれらが一体となって一つの個性をこしらえている存在です。健康というのはその三つの要素の間の協調関係であり、規則的リズムであり、一体関係です。健康を得る方法はそれ以外にはありません……。

地上は無知だらけです。死を恐ろしい怪物のように思って避けようとしています。死を恐怖心をもって迎えています。死も自然の摂理の一環にすぎません。」

シルバーバーチの霊訓（9）より

心の糧

❖地上へ誕生してくる時、魂そのものは地上でどのような人生をたどるかを、あらかじめ承知しております。潜在的大我の発達にとって必要な資質を身につけるうえでそのコースがいちばん効果的であることを得心して、その大我の自由意志によって選択するのです。その意味であなた方は、自分がどんな人生を生きるかを承知のうで生まれて来ているのです。

...

❖あなた方は常にリラックスし、受動的で穏やかで平静で、しかも奥に自信を秘めた状態であらねばなりません。その状態にあるかぎり万事がうまくいき、必要とするもの全てが施されるとの確信をもたなければいけません。

...

❖霊的に見て、あなたにとって何がいちばん望ましいかは、あなた自身には分かりません。もしかしたら、あなたにとっていちばん嫌なことが実は、あなたの祈りに対する最適の回答であることも有り得るのです。ですから、なかなか難しいことではありますが、物事は物的尺度ではなく霊的尺度で判断するように努めることです…
…神は決して我が子を見捨てるようなことは致しません。しかし神が施されることを地上的なモノサシで批判することはやめなくてはなりません。

...

❖霊的真理を一つでも多く理解していくことが、あなた方の魂と霊的身体を、霊界からのエネルギーを受けやすい体質にしていきます。これは地上と霊界を結ぶ磁気的な絆なのです。

...

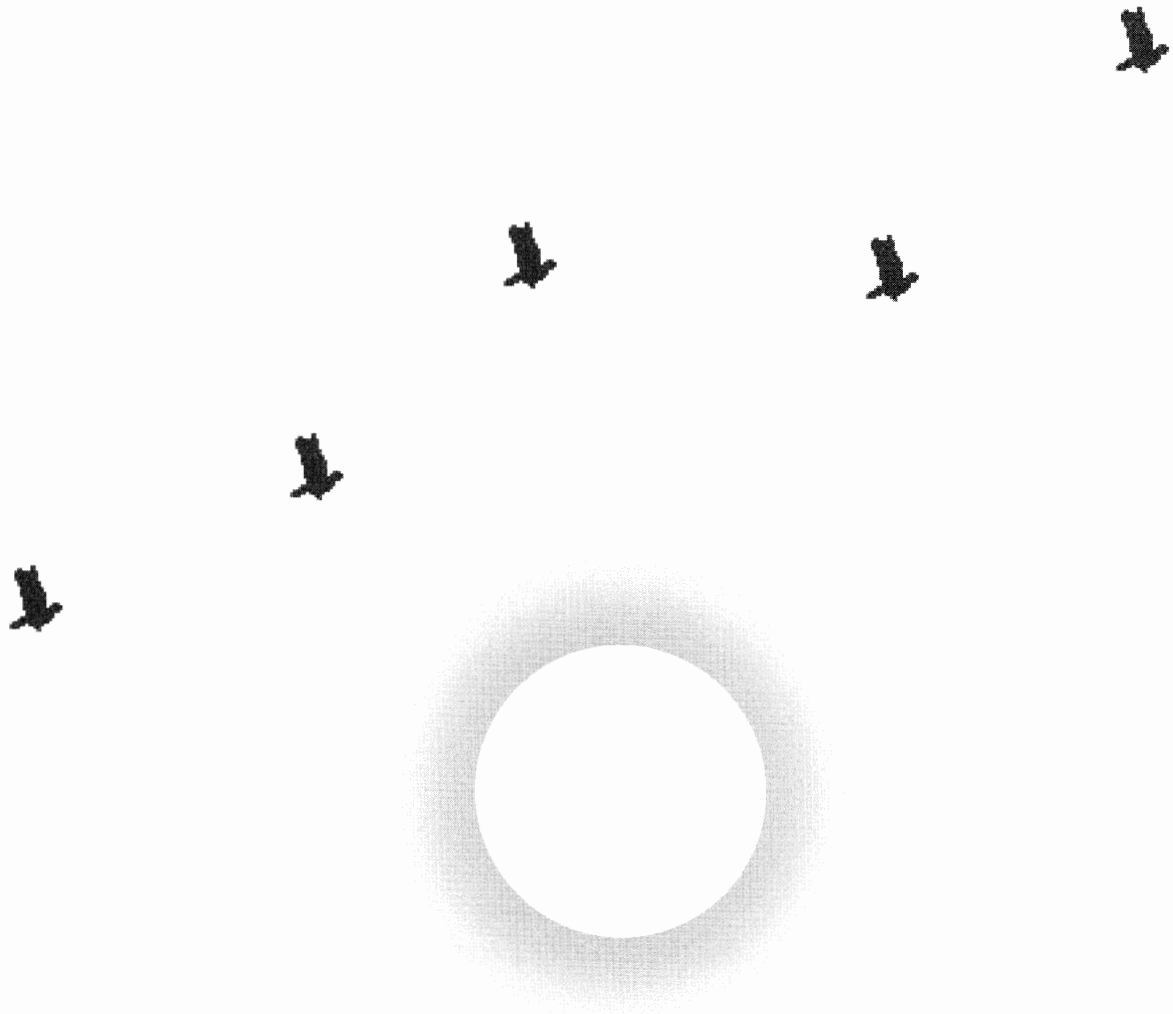
❖地上の価値判断の基準は私どもの世界とは異なります。地上では“物”を有り難がり大切にしますが、こちらでは全く価値を認めません。人間が必死に求めようとする地位や財産や権威や権力にも重要性を認めません。そんなものは死とともに消えてなくなるのです……世間の称賛はいつでもよろしい。人気というものは容易に手に入り容易に失われるものです。

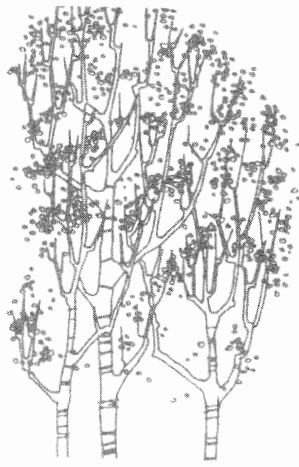
シルバーバーチの霊訓（1）より

❖ スピリチュアリズム・ライブラリー ❖

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

- ◆スピリチュアリズム入門 (169頁)
ースピリチュアリズムが明かすー「心霊現象のメカニズム&すばらしい死後の世界」
- ◆続スピリチュアリズム入門 (256頁)
ー高級霊訓が明かすー「霊的真理のエッセンス&霊的成長の道」
- ◆霊媒の書 (297頁)
スピリチュアリズムの真髄「現象編」
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳
- ◆霊の書 (357頁)
スピリチュアリズムの真髄「思想編」
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳
- ◆500に及ぶあの世からの現地報告 (437頁)
ーエクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活ー
『Life After Death』 ネヴィレ・ランドル著／小池 英 訳
- ◆マイヤースの通信ー永遠の大道 (全訳) (271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳
- ◆マイヤースの通信ー個人的存在の彼方 (全訳) (304頁)
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄
- ◆霊訓 (完訳・上) 『The Spirit Teachings』 (225頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳
- 〈今後の出版予定〉
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『Teachings of Silver Birch』 (全訳)
A. W. オースティン編／近藤千雄 訳
- 〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『A Voice in the Wilderness』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
- ◆霊訓 (完訳・下) 『The Spirit Teachings』 ※5月中旬に刊行予定
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳





Spiritualism Circle
Kokoro no Dojo